

赤星たみこ先生トークショー

MC : アクアデミア校長 山中亜希

2016年3月27日 第7期アクアミネラーレ協会総会

テーマ

日本水大賞とストックホルム水大賞

ストックホルム青少年水大賞



ストックホルム青少年水大賞審査会場 2015年8月26日

1) 世界にはノーベル賞に匹敵する大きな賞がたくさんある

数学に関する賞

- ・フィールズ賞 若い数学者の優れた業績を顕彰し、その後の研究を励ますことを目的に 1936 年に作られた。40 歳以下という年齢制限がある。
- ・アーベル賞 2001 年に設立された（年齢制限なし）。
- * 化学や物理、経済など、他の分野でもノーベル賞に匹敵する賞がたくさんある。

森林関連分野

- ・マルクス・ヴァレンベリ賞 スウェーデン国王から授与される。

水環境関連分野

- ・ストックホルム水大賞 (Stockholm Water Prize) 水環境の研究者、水環境を良くするための活動をしている人を顕彰するための国際的な賞。1991 年に創設された。年齢制限なし。スウェーデン国王から授与される。まさにノーベル賞と同じグレードの賞。
- ・ストックホルム青少年水大賞 (Stockholm Junior Water Prize) SWP の青少年版。国際水大賞のジュニア版。年齢制限があり、20 歳以下の若い研究者（高校、高専などの学生）が対象。世界中から研究論文を募集している。スウェーデン王女から授与される



2) 水のノーベル賞をなぜストックホルム水大賞と呼ぶのか

スウェーデンはノーベル賞に匹敵する賞の中でも、環境系の賞をたくさん創設し、国王が授与している。スウェーデン王家の学問や環境に対する意識の高さの表れであり、さらに、これが国の尊厳を高める。

さらに、ストックホルムは、多くの島を持つ都市で、水辺の美しさが有名なこと、森林も豊富で、水環境も良い都市として知られているところから、水環境に関心の高い地域である。水環境の研究所、SIWI＝ストックホルム国際水協会もある。

元々、水環境に関心の高い地域であり、研究機関もあるところから、この地の名前を冠した世界的な賞を作った。これがストックホルム水大賞 (SWP) である。SWP はストックホルム水財団、スウェーデン王立科学アカデミー、国際水協会、水環境連盟、ストックホルム市がサポートし、スウェーデン国王・グスタフ 16 世の後援を受けている。

過去に日本人も二人授賞している。1994 年 久保赳 (くぼ たけし) 氏、2001 年 浅野孝 (あさの たかし) 氏

3) 日本でも水環境関連の賞がある

- ・日本水大賞 日本の水環境を良くするために研究、活動している人々、団体、自治体などを応援し、顕彰するための賞。

名誉総裁：秋篠宮文仁親王殿下 委員長：毛利衛

日本水大賞



日本全国をカバーする賞ですが
国際的な活動にも授与されます

後援・・・国土交通省、環境省、外務省、文部科学省、厚生労働省、農林水産省、
経済産業省、公益財団法人河川財団 公益社団法人環境科学会、
公益財団法人世界自然保護基金ジャパン（WWF ジャパン）、
全国市町村教育委員会連合会 など、多数
事務局・・・日本河川協会

日本には、日本水環境学会などが主催した賞など、水環境系の賞はたくさんあるが、秋篠宮文仁殿下を名誉総裁にする賞は、日本水大賞だけである。

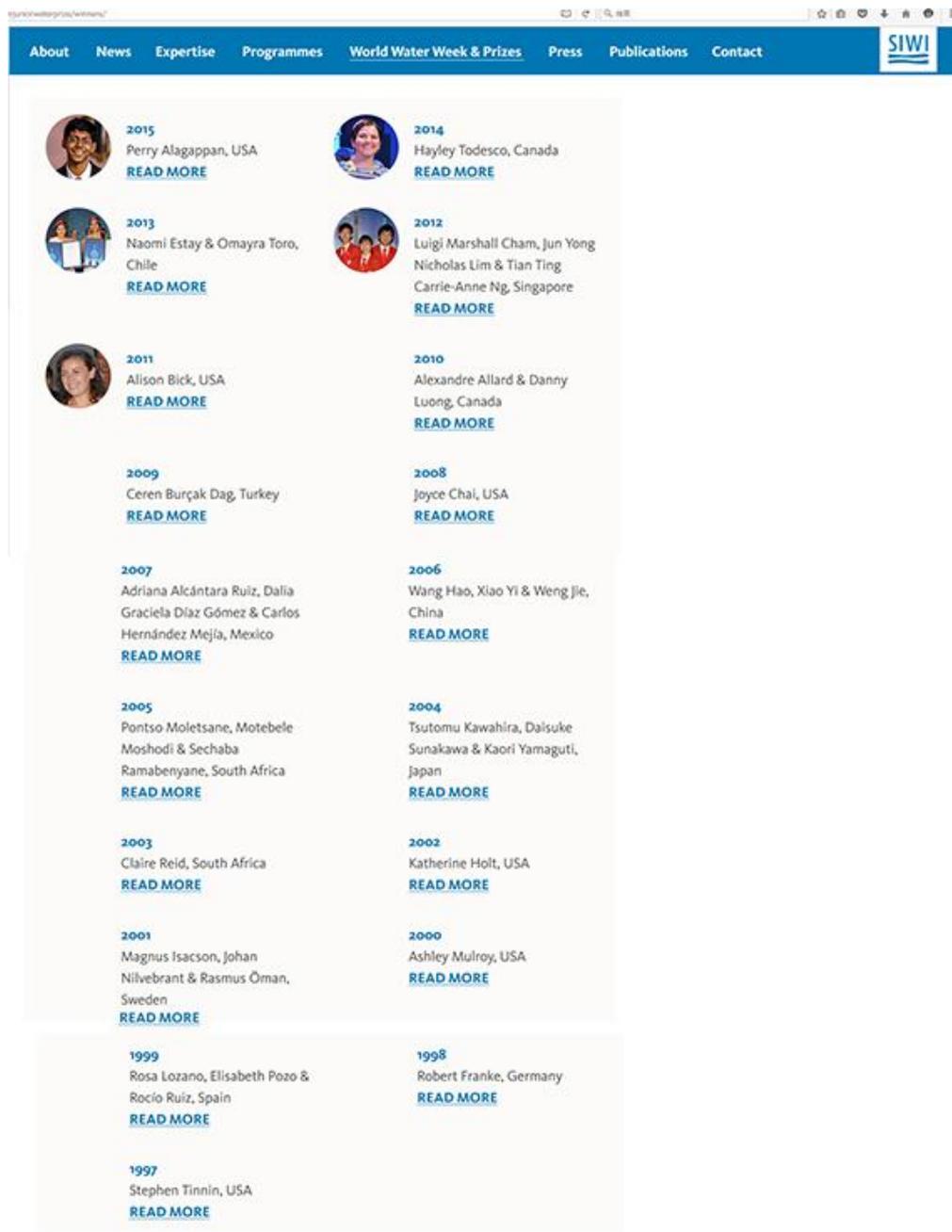
4) スtockホルム青少年水大賞 (Stockholm Junior Water Prize) とは？ そして問題点

20歳以下の若い研究者が対象。世界中の高校生が、まずそれぞれの国内で審査を受け、予選を突破した高校生たちが、研究成果の論文を持って毎年8月にストックホルムへ集結する。

日本では高校、高専の学生たちが、研究論文を日本水大賞の事務局へ送り、審査され、国内予選で最優秀賞を取った高校（または高専）が、ストックホルムへ向かう。

SJWP は 1997 年が第一回。

ストックホルム国際大会でのグランプリを受賞したのは、97年アメリカ、98年アメリカ、99年スペイン、2000年アメリカ、01年スウェーデン、02年アメリカ、03年南アフリカ、04年日本、05年南アフリカ、06年中国、07年メキシコ、08年アメリカ、09年トルコ、10年カナダ、11年アメリカ、12年シンガポール、13年チリ、14年カナダ、15年アメリカ。



特筆すべきは 2004 年の日本の沖縄県立宮古農林高等学校がグランプリを授賞したこと。その翌年には日本では英語の教科書に掲載されるほどだったが、やはり日本国内での知名度は低い。知名度の低さは、日本水大賞も同じである。

5) 水大賞の意義

「水大賞」と聞くと、たいてい返ってくるのが「美味しい水を決めるグランプリ?」「日本名水の賞ですか?」というもの。日本水大賞委員の一人として、憂慮すべき事態だと思う。

日本ではいつでも美味しい水が飲めるという幸せな状況にあるが、その幸せは、汚水浄化、河川の浄化、汚濁物質を除去する機械の研究発明などが支えている。

私たちが美味しい水を飲めるのは、毎日の食事やお風呂、トイレにまで美しい水をふんだんに使えるのは、地道な研究を続けている人たちがいることを忘れないでほしい。